メッセージアウトライン
サムエル記第一24:1～22

「おまえは私より正しい」

[1-2]「サウルがペリシテ人を追うのをやめて帰って来たとき、『ダビデが今、エン・ゲディの荒野にいます』と言って、彼に告げる者がいた。サウルは、イスラエル全体から三千人の精鋭を選り抜いて、エエリムの岩の東に、ダビデとその部下を捜しに出かけた」

サウルはイスラエルの地に侵入して来たペリシテ人と戦うために、ダビデを追うのを一時的に止めたが(23:27~28)、その戦いが終わると、またもダビデを追い始めた。そして、彼はダビデが今、エン・ゲディの荒野にいるとの知らせを聞いた。エン・ゲディは死海の西岸中央部にある石灰岩の地で多くの洞穴や泉がある。ダビデと六百人の部下たちは四六時中隠れていることもできず、食料調達などのために地元の人々との交流もあったのであろう。その中でサウルにダビデのことを知らせる者がいてもおかしくない。サウルは三千人の討伐隊を組織して、エン・ゲディの荒野にダビデを追った。

「エエリムの岩」とは「やぎたちの岩」という意味。そこで多くのやぎたちが放牧されていたのか。

[3]「道の傍らにある羊の群れの囲い場に来ると、そこに洞穴があった。サウルは用をたすために中に入った。そのとき、ダビデとその部下は、その洞穴の奥の方に座っていた」

「羊の群れの囲い場」…羊の群れを野獣などから守るために石を積み上げて囲ったもの。そこに洞穴があったが、それは大人数が中に入れるほど、相当大きな洞穴であったのだろう。

「用をたすため」…「足をおおう(直訳)」…用便のこと。

[4]「ダビデの部下はダビデに言った。『今日こそ、主があなた様に、【見よ、わたしはあなたの敵をあなたに渡す。彼をあなたの良いと思うようにせよ】と言われた、その日です。』ダビデは立ち上がり、サウルの上着の裾を、こっそり切り取った」

ダビデの部下が引用した主のことばはサムエル記の記録にはない。しかし、今日このような状態にサウルを導かれたのは主のみこころですと部下たちは思ったのかもしれない。

絶対的なチャンスであったが、ダビデはサウルのいのちを取る代わりに、その上着の裾を、こっそり切り取った。

[5-7]「後になってダビデは、サウルの上着の裾を切り取ったことについて心を痛めた。彼は部下に言った。『私が主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対し

て、そのようなことをして手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。彼は主に油注がれた方なのだから。』ダビデはこのことで部下を説き伏せ、彼らがサウルに襲いかかるのを許さなかった。サウルは、洞穴から出て、道を歩いて行った」

ダビデはサウルを殺す代案として彼の上着の裾をこっそり切り取ったが、その行為に自責の念を感じた。なぜなら、サウルは狂気に駆られているとはいえ、イスラエルの王として主に油を注がれている。すなわち神によって王として立てられている人物であったからである。→10:1

[8-9]「ダビデも洞穴から出て行き、サウルのうしろから呼びかけ、『王よ』と言った。サウルがうしろを振り向くと、ダビデは地にひれ伏して、礼をした。そしてダビデはサウルに言った。『なぜ、【ダビデがあなたに害を加えようとしている】と言う人のことばに、耳を傾けられるのですか』」

ここはサウルに対するダビデの問いかけである。サウルは聞き覚えのあるダビデの声に驚いてうしろを振り向いた。地にひれ伏して、礼をするのは王に対する敬意の表現。「なぜ、……人のことばに耳を傾けられるのですか」…ダビデは「人のことば」ではなく、サウル自身の猜疑心にすべてが発していることをよく知っていたが、王への礼儀、また外交辞令としてこのような表現を用いたのであろう。

[10-11]「今日、主が洞穴で私の手にあなたをお渡しになったのを、あなたの目はご覧になったのです。ある者はあなたを殺すようにと言ったのですが、私は、あなたのことを思って、『私の主君に手を下すことはしない。あの方は主に油注がれた方だから』と言いました。わが父よ。どうか、私の手にあるあなたの上着の裾をよくご覧ください。あなたの上着の裾を切り取りましたが、あなたを殺しはしませんでした。それによって、私の手に悪も背きもないことを、お分かりください。あなたに罪を犯していないのに、あなたは私のいのちを取ろうと狙っておられるのです」

10節はダビデがサウルを殺さない理由が述べられている。→6節　サウルを殺すことがあたかも主のみこころであるかのようにダビデに迫った部下たちに対して、そのようにしなかったのは、憐みの情や寛容の思い、後ろから切りつけることを良しとしない武士道精神などのゆえではなく、サウルが「主に油注がれた方」であったからである。主に油注がれた方を手にかけて殺すということは、どれだけ死の危険に迫られていたとしても、ダビデにとって決してできないことであった。

11節はその証拠としての、切り取られたサウルの上着の裾である。切り取った上着の裾を示して、ダビデは自分にはサウルに対する悪も背きの思いもない、それなのにサウルは自分のいのちを狙っていると訴える。

[12-13]「どうか、主が私とあなたの間をさばき、主が私のために、あなたに報いられますように。しかし、私はあなたを手にかけることはいたしません。昔のことわざに『悪は悪者から出る』と言います。私はあなたを手にかけることはいたしません」

ダビデは自分とサウルの間を主が正しくさばいてくださるようにと願う。「主が…あな

たに報いられますように」…ダビデのいのちを取ろうと執拗に彼を追い求めることに対しての主からの報い、すなわちさばきである。
「悪は悪者から出る」ということはアダム以来の人間の歴史の中で実感されてきたことであろう。それがことわざになっているのである。ダビデはそのことわざを引用して、自分はそのような悪者ではなく、サウルを手にかけるようなことはしないと自らの潔白性を主張している。
[14-15]「イスラエルの王はだれを追って出て来られたのですか。だれを追いかけておられるのですか。死んだ犬の後でしょうか。一匹の蚤の後でしょうか。どうか主が、さばき人となって私とあなたの間をさばき、私の訴えを取り上げて擁護し、正しいさばきであなたの手から私を救ってくださいますように」
「死んだ犬」…噛みつくこともできない無力で卑しむべきもの。→Ⅱサムエル9:8、16:9
「一匹の蚤」…追うに値しないもの。共にダビデを指し、サウルに害を与える者ではないことを強調している。
「どうか主が、さばき人となって……あなたの手から私を救ってくださいますように」…ダビデはさばきを主にゆだねている。
[16-18]「ダビデがこれらのことばをサウルに語り終えたとき、サウルは『これはおまえの声なのか。わが子ダビデよ』と言った。サウルは声をあげて泣いた。そしてダビデに言った。『おまえは私より正しい。私に良くしてくれたのに、私はおまえに悪い仕打ちをした。私に良いことをしてくれたことを、今日、おまえは知らせてくれた。主が私をおまえの手に渡されたのに、私を殺さなかったのだから。』」
ダビデ追討に血眼になっていたサウルが洞穴での出来事をダビデから知らされたとき、サウルは正気に戻ったのか、感情があふれ、ダビデに向かって声をあげて泣いた。
「おまえは私より正しい」…自分とダビデを比較しているのではなく、自分と違ってダビデの方が神の義にかなっているという意味。サウルは自分の悪行を自覚し、公に認めた。
[19-20]「『人が自分の敵を見つけたとき、その敵を無傷で去らせるだろうか。おまえが今日、私にしてくれたことの報いとして、主がおまえに幸いを与えられるように。おまえが必ず王になり、おまえの手によってイスラエル王国が確立することを、私は今、確かに知った。』」
サウルは今までダビデが王になるということを決して認めてこなかったが、ダビデの今日の一連の行為とことばは、主なる神がダビデとともにおられることをサウルに確信させ、必ずダビデがイスラエルの王になり、王国が確立するということを公に認めた。
[21-22]「『今、主にかけて私に誓ってくれ。私の後の子孫を断たず、私の名を父の

家から消し去らないことを。』ダビデはサウルに誓った。サウルは自分の家へ帰り、ダビデとその部下は要害へ上って行った」
　21節のサウルのことばは、ダビデがイスラエルの王となった時、サウル家に復讐して、一族を絶滅させることがないようにとの願いである。これを受けてダビデはサウルに誓った。この誓いは内容的にはサウルの子ヨナタンとの間で交わされた誓いと同様のものである。→20:15
これですべての問題は解決して、ダビデとサウルは仲良く一緒にサウルの住む王宮に帰って行ったかと言えばそうではない。ダビデはサウルの精神状態が悪化すれば、この後がどうなるか分からないことを知っていた。→19:6~15、20:31~31
　それでサウルはベニヤミンのギブアにある自分の家へ帰って行ったが、ダビデとその部下は同道せず、エン・ゲディにある要害へ上って行ったのである。

　今日の箇所から教えられることはダビデが部下のサウル殺害の示唆にも関わらず、その上着の裾を切り取るだけで決してサウルに手を下さなかったという点にある。その理由はサウルが主によって油注がれ、イスラエルの王とされた人物であったからである。情緒不安定で狂気に突き動かされ、ダビデ殺害に血道をあげるサウルであっても決して殺さない。サウルの不信仰とみこころにかなわない生き方のゆえに、主は彼から去られたが、→16:14　それでも彼が主によって油注がれた者であるという事実は変わらない。それゆえ、ダビデは自分の手でサウルに報復するのではなく、サウルの悪行のさばきと報いをすべて主に委ねている。彼は個人的な考えや思いで物事を進めるのではなく、まず、主のみこころを知り、それに従っていくのである。
→マタイ5:43~48、ローマ12:17~21
そしてダビデもサウルに代わる王として、主によって油注がれた者であった。→16:1, 13
ここに至るまで主は彼を苦しみや試練を通して導かれてきた。そのような過程を通して彼は次のイスラエルの王としての品格と霊性、指導力、忍耐力、統率力を身につけていくのである。
ダビデがサウルから逃れて洞窟にいたときに詠んだ詩が詩篇57篇である。